

陸橋の上で

渡辺 斉

無数のテールランプが去っていく夜 私も後向きになって夜を迎える ネオンサインも裏返しになって 純白の輝きを増す 何故にかくまでもしつこく 人にまとわりつくのか 完膚なきまでに打ちまなおその上に唾を吐き そうまでして何を示そうとするのか も早何も信じてはいない者に

散らばったあれらの無数の小さい灯群は 私には無関係な 夜に穿たれたやさしさなのか それとも私を襲った残酷な霧が やはりほくそえんでいるしか 舗道は突然陥没し 縞模様を無様にさらけ出した崖ふちを 陰険な眼差しの高が横滑りしていく 味方などいるはずがないとげとげしい風が砂塵を巻き上げ 誰も通らない道を どこまでも歩き続ける 寒々とした朝の気配が忍び寄っている

欄干にもたれて一体何を見ていたのか この風景のほかは何が見えよう 風が消えるあたり かすかに光っているのは 決してどこかへの入口ではない また出口でもないのだ 出口のない風景の中で 糸を紡ぐほかない 何の役に立つものでもなく さりとて彩りもなく ただ存在の証しのために 己れの時間のメタモルフォーゼのために 陸えた風の中で